

「和鉄の道・Iron Road」から見た日本誕生前夜の北近江・若狭

北近江・若狭が輝いた時代

《 レジメ 》

1. 大和王権の成立前夜 大陸・朝鮮半島交易を担った玄界灘の海人族
近江安曇川の地名の元となった海人族「安曇族」
 2. 大陸・朝鮮半島や東国への大和の玄関口 若狭・北近江の和鉄の道を訪ねる
 - 2.1. 安曇川の左岸 琵琶湖を見晴らす饗庭野丘陵
多量の鉄素材を出土した熊野本弥生集落遺跡と古墳時代前期の古墳群熊野本古墳群
 - 2.2. 丹後にとってかわった大和の玄関口 若狭/北近江
5世紀 若狭国 初期前方後円墳の王墓群 脇袋古墳群
 - 2.3. 若狭と大和そして 朝鮮半島交流との深い関係を示す若狭
遠敷川(おにゅうがわ) 「鵜の瀬の水送り」
 3. 近江は鉄の国 古代近江で育てられた量産型たたら製鉄
鉄を必要とする拠点での古代製鉄コンビナートのベースを作った
- ◎ わたしの life work スライド「和鉄の道・Iron Road たたら製鉄遺跡探訪」 約15分

弥生末期から古代奈良時代にかけて 大陸・朝鮮半島との最大の交易品は「朝鮮半島の鉄素材」

その鉄を日本に持ち込んだ航海術にたけた海人族・渡来人たちがいた。

古墳時代から古代 大陸・朝鮮半島への大和の日本海側玄関口として「輝いた北近江・若狭」の時代でもある。

文物ばかりでなく、数多くの人たちが行き来し、新しい文化・技術が息づき、交易を生業として 大陸・日本各地をめぐる担航海術にたけた人たち海人族と呼ばれる人たちが活躍し、この海人族や渡来人が朝鮮半島・大陸と日本の交流を支え、日本各地に文化・技術を伝え、日本の国づくりに大きな役割を演じつつ、日本各地に定住していった。

北近江・若狭にもそんな人たちが数多くおり、大和との連携しつつ、大きな役割をしたと考えられている。

北近江 安曇川はそんな海人族の人たちがいた痕跡が、安曇川の地名に残っている。

この時代の交易の中心は朝鮮半島の鉄素材。その鉄が若狭・北近江を通過して、日本各地に広がり、数々のドラマを生み、素晴らしい景色を作っていた。自分たちの町の祖先たちがその過程に大きな役割を果たしていたと考えてみてください。そんな「鉄」の景色のスライド集を最後に見ていただき、まとめとします。

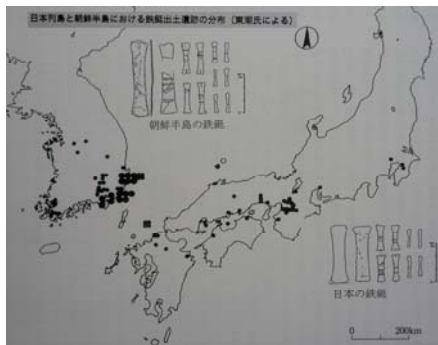
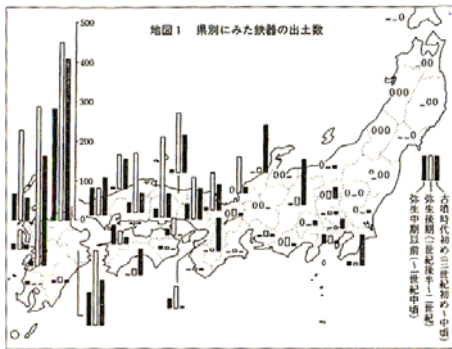
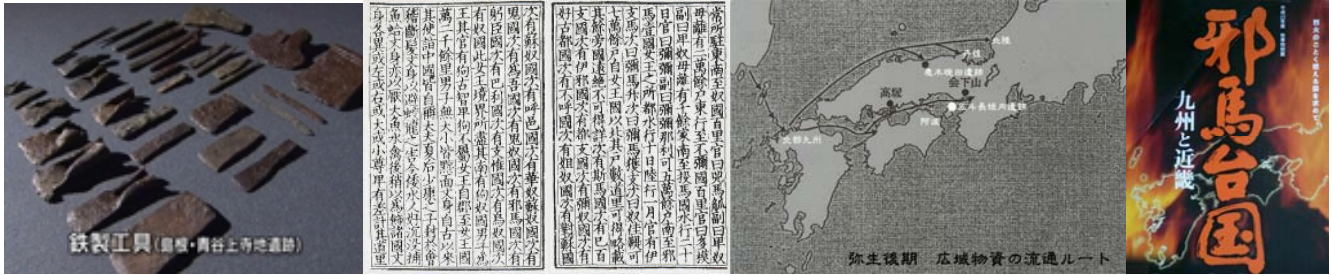
【 プレゼン ベース資料 】

1. 「和鉄の道・Iron Road」 北近江 安曇川・マキノ 雪の山郷 Country walk
<http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/5iron01.pdf>
2. 「和鉄の道・Iron Road」 南北市郷(してき) 朝鮮半島と倭を結ぶ「和鉄の道」
<http://www.infokkna.com/ironroad/2011htm/iron7/1109yayoiironroad.pdf>
3. 「和鉄の道・Iron Road」 卑弥呼の時代からの大陸への玄関口 若狭・北近江の「若狭街道」
大陸・朝鮮半島の鉄を求めて続く若狭・北近江の「和鉄の道」を訪ねて
<http://www.infokkna.com/ironroad/2008htm/iron4/0810wksa00.htm>
4. 「和鉄の道・Iron Road」 古墳時代朝鮮半島との交流玄関口「若狭」を再度訪ねる
<http://www.infokkna.com/ironroad/2011htm/iron7/1110wakasa00.htm>
5. 「和鉄の道・Iron Road」 愛媛大・今治市共同シンポジウム「鉄と古代国家 今治に刻まれた鉄の歴史」
<http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/6iron15.pdf>

【1】 南北市糴（してき） 朝鮮半島と倭を結ぶ「和鉄（てつ）の道」

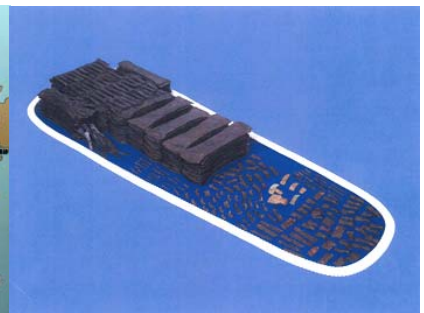
魏志倭人伝の時代 朝鮮半島の鉄との交易品は何か……

2011.8.25. by Mutsu Nakanishi



魏志を読むと「**国出鉄、韓、濊、倭皆從取之**」という記事と一緒に倭人伝 壱岐・対馬の記事の中に「**南北市糴**」という言葉がでてくる。「**糴**」を何と読むのか不思議で 読めなかった漢字。「テキ」と読み、「米を買い入れる」ということから「交易」を意味するという。弥生の末期 北部九州諸国に独占されていた鉄器の集積が、山陰日本海沿岸諸国(麦木晩田 青谷上寺地 丹後 北陸)から畿内へと広がってくる時代である。

昨今の纏向遺跡の発掘などによって 邪馬台国大和説が大きくクローズアップされ、「古代国家形成に至る黎明 邪馬台国・魏志倭人伝の時代 卑弥呼の邪馬台国連合を結びつけていたのは朝鮮半島の鉄の流通路を安定確保する支配力」として朝鮮半島と日本列島を結ぶ 和鉄(てつ)の道が大きく注目されるようになった。



紀元前3世紀 大陸や朝鮮半島から 新しい技術や人々の渡来があつて 集落から地域集団そして国へと日本の国づくりが大きく展開されてゆく時代である。 豊かさを求め、群雄割拠・連合の戦乱の中で、「鉄」は農耕・国土開拓にとって必須で、朝鮮半島の鉄入手を求めた。

この和鉄の道で倭の国々は「朝鮮半島の鉄器素材と何を交換したのだろうか？

また 遠く離れた列島諸国とこの朝鮮半島との鉄の道の交易 海の道を渡ったのは誰か ??

翡翠・水晶などの宝石鉱物・銅・貝類などの加工品(威信財・装身具・祭祀具) 織布(麻・錦) 海産物 穀物 木材 等々 数々の説が発表され、最近読んだ本には「硫黄」や「塩」を倭側交易品と考えている人もいる。

今まで 数多くの研究が発表されているが、いまだ確論がない。

日本での製鉄が始まりを解く謎のひとつであり、邪馬台国から大和王権の成立へ 古代国家の成り立ちを解く謎として多くの人たちのロマンを掻き立ててきた謎のひとつであり、私にとっても いつも不思議に思いながら解けぬ謎。

つい 先日も 知人から「『朝鮮半島の鉄 朝鮮半島の鉄』と言うが、その日本側の交易品はなになのか?」と問われ、自分でもややもやしていますので、よい機会 資料を調べ直し始めました。まだ、結論は出ていませんが、この朝鮮半島の鉄を巡る諸国の交易品について、まとめてみました。



韓国の鉄錠

日本の鉄錠

この時代の朝鮮半島と大和との交流を知る手掛かりは 中國の魏書に書かれた朝鮮半島並びに日本列島諸国の記事と発掘調査によって年々明らかになってきた事実をあわせ考えることである。

■ 魏書によると まだ製鉄技術のなかった倭国の諸国は朝鮮半島の鉄を求め、活発に交流し、勢力を伸ばした邪馬台国は北部九州から朝鮮半島に至る出発港である伊都国に「一大卒」を置いて、朝鮮半島と行き来する物品・人を監視していたという。

■ また、この時代 農耕が乏しい壱岐・対馬には 航海術にたけた「海人」族の勢力があり、積極的に朝鮮半島と北部九

州や日本列島諸国との間を自由に行き来し、「南北市糴」中継貿易を行っていたという。

■ そして、朝鮮半島・日本で広く現れたバチ状薄鉄板「鉄ティ」が魏書にある物品交易の貨幣の役割を担った鉄とも言われている。

朝鮮半島や日本で大量にみつかる「鉄ティ」が数多くの実用鉄器の鉄素材とは考えにくく、これが貨幣の役割を果たしていたとすると中継貿易が大いに隆盛したことがうかがえ、かつ倭諸国が直接朝鮮半島に行かずとも北部九州や壱岐・対馬で朝鮮半島の鉄が手に入れられたと考えられる。 また、この中継貿易をイメージするとその交易品も広く考えられる。

いままで、朝鮮半島の鉄について 壱岐・対馬の役割をあまりイメージしていませんでしたが、近年の発掘調査で次第に明らかになってきた壱岐・対馬の「海人」の活躍を考えねばならない。



1. 魏書に記載されている弥生時代末 3世紀頃の倭と朝鮮半島の交流

1.1. 魏書(286)に書かれた鉄関連記事

■ 「魏誌 東夷伝・弁辰条」

国出鉄、韓、濊、倭皆從取之。諸市買皆用鉄、如中國用貨、又以供給二郡。

国、鉄を出す。韓、濊、倭 皆從がいて之を取る。貨幣がわりにも鉄を用いる、また以て二郡に供給す

■ 「魏誌倭人伝」

自女王國以北、特置一大率、檢察諸國、諸國畏憚之。常治伊都國、於國中有如刺史。

王遣使詣京都、帶方郡、諸韓國、及郡使倭國、皆臨津搜露、傳送文書賜遺之物詣女王、不得差錯。

女王国の北方の諸国には「一大率」という官が置かれて国々を監視している。

一大率は伊都国にあり、魏の刺史のような役目を果たしている。

伊都国は外交の中心地で魏や韓の国々の使節はここに停泊して文書や贈物の点検を受けて女王に送っている。

1.2. 「魏志倭人伝」に描かれた倭国 壱岐・対馬・伊都国

< 倭 国 >

「倭人在帶方東南大海之中依山島爲國邑舊百餘國 漢時朝見者今使譯所通三十國

從郡至倭循海岸水行歷韓國乍南乍東到其北岸 狗邪韓國七千餘里」

倭人は帶方（今のソウル付近）の東南大海の中にあり、山島に依りて国邑をなす。旧（もと）百余国。

漢の時朝見する者あり、今、使訳通ずる所三十国

郡（帶方郡）より倭に至るには、海岸に循（したが）って水行し、韓国（主に馬韓）を歴（へ）て、

乍（あるい）は南し乍（あるい）は東し、その北岸狗邪韓国（くやかんこく）に到る七千余里。

＜ 対 馬 ＞

「 始度一海千餘里至對海國 其大官曰卑狗副曰卑奴母離 所居絶島方可四百餘里
土地山險多深林道路如禽鹿徑 有千餘戸無良田食海物自活乗船南北市糴 」

始めて一海を渡る千余里、対海国（対馬）に至る。其の大官を卑狗といい、副を卑奴母離（ひなもり）という。
居所絶島、方四百余里ばかり。土地は山険しく、深林多く、道路は禽鹿の径の如し。
千余戸あり。良田なく、海物を食して自活し、船に乗りて南北に市糴（してき）す。

＜ 壱 岐 ＞

「 又南渡一海千餘名曰瀚海至一大國 官亦曰卑狗副曰卑奴母離 方可三百里
多竹木叢林有三千許 家差有田地耕田猶不足食亦南北市糴 」

また南一海を渡る千余里、名づけて瀚海（かんかい）という。一大国（壱岐）に至る。官をまた卑狗
といい、副を卑奴母離という。方三百里ばかり。竹木・叢林多く、三千ばかりの家あり。やや田地あり、
田を耕せどもなお食するに足らず、また南北に市糴す。

＜ 伊 都 ＞

「 東南陸行五百里到伊都國官曰爾支副曰泄謨觚柄渠觚 有千餘戸 世有王皆統屬女王國郡使往來常所駐 」
東南陸行五百里にして、伊都国に到る。官を爾支といい、副を泄謨觚・柄渠觚という。千余戸あり。世々王あるも、
皆女王国に統属す。郡使の往来常に駐（とど）まる所なり。

＜邪馬台国への道程＞

「 東南至奴國百里官曰馬觚副曰卑奴母離有二萬餘戸
東行至不彌國百里官曰多模副曰卑奴母離有千餘家
南至投馬國水行二十日官曰彌彌副曰彌彌那利可五萬餘戸
南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行一月 官有伊支馬
次日彌馬升次日彌馬獲支次日奴佳可七萬餘戸 」

東南奴国に至る百里。官を馬觚といい、副を卑奴母離という。二万余戸あり。
東行不弥国に至る百里。官を多模といい、副を卑奴母離という。千余家あり。
南、投馬国に至る水行二十日。官を弥弥といい、副を弥弥那利という。五万余戸ばかり。
南、邪馬壹国に至る、女王の都する所、水行十日陸行一月。官に伊支馬あり、次を弥馬升といい、
次を弥馬獲支といい、次を奴佳タイという。七万余戸ばかり。

2. 南北市糴（してき） 朝鮮半島との中継貿易を担った壱岐の王都 原の辻遺跡



壱岐 原の辻遺跡



原の辻遺跡から出土した外洋につながる船着き場

北部九州と朝鮮半島の間にある対馬・壱岐について、魏志倭人伝は 「山ばかりで農
耕ができない島で、人々は南北に「市糴」して暮らしている」と書かれている。

「良田なく、海物を食して自活し、船に乗りて南北に市糴（してき）」した対馬
「やや田地あり、田を耕せどもなお食するに足らず、また南北に市糴」した壱岐

「市糴（してき）」とは何か・・・ おぼろげには「交易」と思いながら、調べた
ことなく、魏志倭人に接するたびに気になっていた言葉である。

市糴とは「米を買うこと」これが交易を表す熟語となったもので、対馬・壱岐が市糴

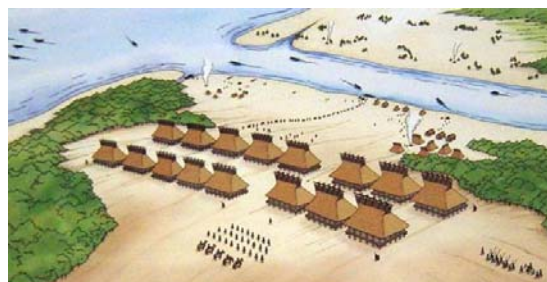


した南は日本列島、北は朝鮮半島にほかならない。玄界灘に浮かぶ壱岐・対馬は古くから朝鮮半島や日本列島を行き来する「海人」の人々の本拠地であり、自給自足のできない対馬・壱岐では、南北に市糴（交易）することが当然の道。航海術にたけ、朝鮮半島の事情をよく知るこの人たちが魏志倭人伝に描かれた朝鮮半島との交流の道を握っていたと考えられる。また、弥生時代の後期から古墳時代 交易拠点・港には建ち並んだ大型穀物倉庫群遺構が出する。

○福岡比恵遺跡倉庫群・吉野ヶ里遺跡高床式倉庫群・紀ノ川 鳴滝倉庫群・大阪法円坂倉庫群 など

これは 穀類が主要な交易品であることを示しており、交易のベース商品として朝鮮半島の鉄 日本諸国の穀類の仲介であつた証拠かもしれない。また、海産物なども同じ性格をもっていたのだろう。

これら穀物や海産物の現物は見つからぬが、壱岐・対馬そして 北部九州側の拠点伊都国や、4世紀伊都国にとって代わり、大和と深い関係を持つ新たな貿易港となった博多湾の拠点(博多西新町遺跡など)には日本各地の物産や交易品を入れていたと考えられる日本各地の土器や朝鮮半島の土器類が多数見つかっている。



紀ノ川河口 鳴滝倉庫群 イメージ図



魏志倭人伝に記された一大国の王都を復元した 壱岐 原の辻遺跡

原の辻遺跡は、弥生時代を中心とする大規模な多重環濠集落であり、中国の歴史書『魏志倭人伝』記載の「一支国(いきこく)」の王都として特定された極めて重要な遺跡である。

遺跡は、平野に張り出した台地と低地一帯に立地し、100haほどの範囲が推定される。環濠内と低地には居住域が広がり、台地中央

の頂部に高床建物をもつ祭儀場跡が存在する。6箇所ある墓域では、石棺墓・土壌墓(どこうぼ)を主体として、中国鏡・銅剣・腕輪の青銅器、ガラス玉・勾玉(まがたま)などが副葬された有力者の墓も認められる。台地西側の低地では、これまでに確認されている中では東アジア最古の船着き場跡が発見され、中国や朝鮮半島へ渡り、交易をおこなっていた海洋民の姿を今に伝える。また、周辺の低地では稲作を行っていたことが確認されつつある。

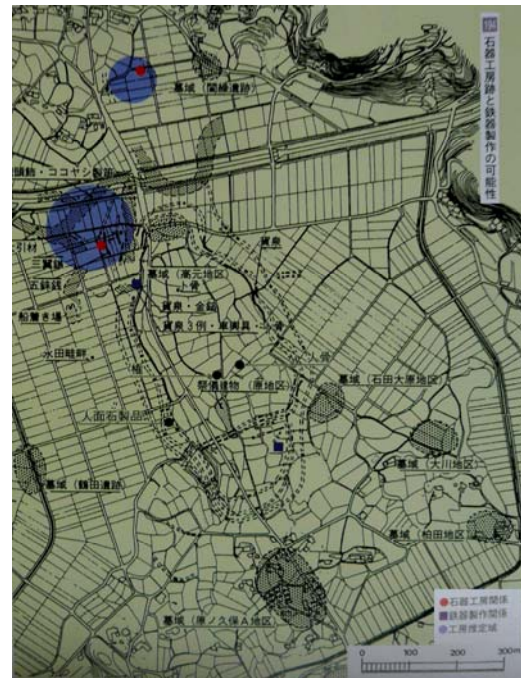
遺物は、青銅製馬車具、三翼鏃(さんよくぞく)、中国貨幣(五銖銭(ごしゅせん)・貨泉(かせん)・大泉五



十(たいせんごじゅう))、鉄器、朝鮮半島系土器、床大引き材、ココヤシ製笛など、大陸との交流・交易を物語る遺物が多く出土している。指定面積は、184,400.23㎡(H21.12追加指定分1,741㎡を含む)。

集落形成は、弥生時代前期末に始まり、中期前半に多重の環濠を掘削して大集落となり、後期には環濠が再掘削されましたが、古墳時代前期に環濠は埋没して集落は衰退した。環濠内側では掘立柱建物群・住居域・土坑(どこう)群・墓域などが、環濠外側では墓域・船着場状遺構・水田遺構・通路状遺構などが検出され、北部九州地方を中心として近畿地方、さらには、大陸・朝鮮半島にいたる地域からの多量の搬入品が出土しており、海を介した広域交流が行われた交易拠点であったと考えられている。

また、原の辻には 海からの陸揚げ船着き場・市場とともに、石器→鉄器の工房があり、変化する国際情勢に対処して中継貿易の機能を維持が図られていた。(環濠・船着場整備・工具の製作修理など)



南北市羅(してき)原の辻遺跡 市場推定位置
原の辻遺跡ノ北部 外洋につながる川の船着き場に接する
朝鮮半島の遺物が数多く出土している

原の辻遺跡の生産工房跡
各種石器製作から鉄器製作へ



半島・中国・日本各地との交流を示す大量の出土品原の辻遺跡の出土品
朝鮮半島・日本各地の土器・石製品・銅製品・鉄製品・中国の銅貨・鏡・玉類・
紡錘車そして穀物類等々 ・

5. 魏志倭人伝の時代 朝鮮半島の鉄と交換した日本側の交易品の整理まとめ

穀類・海産物・絹布・白珠・青珠・勾玉・朱・木材などが 日本側交易品ではないか

朝鮮半島への交易品の記載を示す古文書は見つかりませんが、魏志倭人伝には中国との交流に邪馬台国が貢納した品物の記載 並びに 倭国と朝鮮半島の交流の様子の記載があり、これは重要な手がかり。

これらと当時の鉄の集積や日本特産品並びに朝鮮半島・日本側の湊拠点の発掘調査レビューと照らし合わせながら日本側の交易品の可能性を調べた。

その結果 ダイレクトに日本側交易品を示すことはできなかったが、日本側の交易候補品そして朝鮮半島の鉄入手交易の様子がおぼろげながら整理できた。

その結果をまとめると下記のとおりである。

1. 邪馬台国から魏への貢納品でもあった 白珠・青珠・倭錦・丹などが記載され、当時これらが日本の貴重な特産品だったと考えられる。
2. 朝鮮半島と北部九州の間にある壱岐・対馬は 魏志倭人伝に記載する通り、交易・航海術にたけた海人族の国で、そこには朝鮮半島・日本各地の物産が集まる市場があり、日本各地・朝鮮半島と活発な中継貿易を行っていたことが、膨大な出土遺物からわかる。
3. この中継貿易を円滑・活性化する貨幣の役割を 鉄テイが担っていた可能性が想定できる。
この広汎活発な中継貿易により、鉄を入手するためには必ずしも朝鮮半島に直接行って交易する必要はなく、北部九州・壱岐・対馬・朝鮮半島などの貿易拠点で交易が可能で、鉄の入手がはるかに容易になっていったと考えられ、国内向けであった各地の特産品・穀物・海産物などがそれぞれ、重要な交易品になりえたと考えられる。
4. 日本各地の特産品の生産工房の展開が鉄製工具を要求し、玉加工や朱などの生産工房の展開と鉄の集積とが密接につながって 相互展開している。
5. 朝鮮半島の南岸並びに北部九州の沿岸拠点(港)や壱岐には日本各地の土器や半島の土器が多数出土する。
これは この土器に入れられ海を渡った交易品の容器と考えられないか
魏志倭人伝の記事と合わせると 穀類・海産物などが、海を渡った可能性は否定できない。

これらの結果をもとに 朝鮮半島の鉄入手と交換された倭側の交易品を考えると、魏志倭人伝に記載された「絹布・白珠・青珠・勾玉・朱」や「穀類・海産物」そして、木材や南海の貝類などが日本側交易品の候補ではないかと。

また、壱岐・対馬が海人族の拠点であることは知っていましたが、半島の鉄入手にこの壱岐・対馬が中継貿易の担い手として きわめて大きな役割を演じていたと気づきました。

同時に この時期 朝鮮半島から大量に持ち込まれた薄鉄材「鉄テイ」の性格がよく判らなかったのですが、中継貿易の繁栄の中、魏志倭人伝の記載にある「鉄が貨幣の役割」と考えるとこの鉄テイの性格が見えてきたように思っています。

これらすべて 確証はありませんが、朝鮮半島と日本をつなぐ「和鉄の道」を往来した交易品が見え、今後の検討のなかで、もっとクリアにできればと思っています。

【 整理に使った資料ほか 整理とともに掲載図面につかせていただきました 】

1. 第五回歴博国際シンポ 「古代東アジアにおける倭と伽耶の交流」論文集 2002. 3. 13. -3. 16.
 2. 大阪弥生文化博物館 発掘「倭人伝」海の王都、壱岐・原の辻遺跡展図録 2002
 3. 京都国立博物館「伽耶文化展」図録 1992
 4. 大阪弥生文化博物館 特別展「北陸の玉と鉄 弥生王権の光と影」図録 2005. 10.
 5. 大阪弥生文化博物館 渡来人登場展 図録 1999. 4.
 6. 近つ飛鳥博物館 鉄とヤマト王権展 図録 2012. 10.
 7. 京都国立博物館 倭国 邪馬台国と大和王権展 図録 1993. 3.
 8. 石田あゆみ 朝鮮半島出土弥生系土器より復元する日韓交渉
 9. 弥生時代の初期鉄器の船載時期とその流通構造の解明 (H17-19 科研費基盤研究報告書 代表 野島永
- インターネット検索 朝鮮半島の鉄 交易品 魏志倭人伝 等 検索より

2、

卑弥呼の時代から大陸への玄関口 若狭・北近江の「若狭街道」
大陸・朝鮮半島の鉄をもとめて続く若狭・北近江の「和鉄の道」を訪ねる

分水嶺「水坂峠」を挟んで和鉄の道をにらむ北近江「高島 熊野本」と若狭「上中 熊川宿 & 脇袋」

2008.9.1、 By Mutsu Nakanishi

1. 北近江「高島 熊野本」

安曇川左岸 饗庭野丘陵 「鉄の加工工房があったという弥生の熊野本集落遺跡」

2. 若狭「上中 熊川宿 & 脇袋」

5世紀 大和と結ぶこの地を治める王の墓群「脇袋古墳群」

若狭ではじめて築かれた前方後方墳・前方後円墳群

日本海に面する「若狭」は大陸・朝鮮半島と畿内・大和を結ぶ「古代 大和の和鉄の道」の北の玄関口

この道を通して 多くの渡来人そして「鉄」や文物が行き来した。

この琵琶湖北岸から若狭へ山越える「若狭街道」周辺には 数々の渡来人の痕跡や大陸・朝鮮半島の鉄の遺物が点在する。

また、大和王権はいち早くこの鉄の供給路・大陸との交流路を確保のため、この地の「王」と結ぶ。そんな証として、古墳時代初期のこの地の「王」たちの王墓である前方後方墳・前方後円墳が数多く築かれた。



日本で製鉄が始まる前夜 そんな大陸からの鉄の流入路の夢を頭に描いて「若狭街道」を訪ねました。



● 北近江 高島市 新旭町「熊野本遺跡」 BC1~1世紀

北近江安曇川の北岸に連なる饗庭野丘陵の南端 熊野本にある弥生の高地性集落 大量の鉄素材を大陸から持ち込んでいたといわれる。琵琶湖の北岸北近江から日本海沿岸・大陸への玄関口「若狭」へ向かう山越えの入り口に当たり、眼下に広がる高島平野と琵琶湖を一望できる。鉄の畿内流入の重要路で 早くから開かれた地であろう。

この地に弥生の大きな集落があり、入手した鉄を鉄器に加工していた。そして、この弥生の集落が消える時期を同じくして、この地の王たちの墳墓が築かれる。

● 北近江 高島市 新旭町「熊野本古墳群」(熊野本遺跡の隣接地) 3世紀

古墳時代安曇川の地を支配した王が、琵琶湖を見下ろす熊野本遺跡の跡地に築いた王墓群

初期前方後円墳・後方墳など大和との密接な関係・鉄製品や朝鮮系遺物の副葬など大和「鉄の道」北の玄関の守りの王の色彩が濃く、この地が重要拠点だった証拠だろう。

● 若狭 若狭町 上中町 脇袋「脇袋古墳群」 5世紀

若狭から北近江へ遡る北川右岸の丘陵地に初期前方後円墳など大和との密接な関係を示す古墳群が築かれ手いる 大和「鉄の道」北の玄関 若狭の出入口であるこの地の王墓群

大陸と大和を結ぶ重要路を守る地域首長の色彩が濃く、大和がこの地 この道を重要視していた痕跡だろう。

ずっと頭にあった日本海沿岸から若狭そして琵琶湖へと 畿内・東国への鉄の流入路 古代大和王権の重要な「鉄の道」。北近江の琵琶湖へ西の比良山塊から流れ下る安曇川の北岸の饗庭野丘陵の南端の弥生の高地性集落「熊野本」遺跡で鉄素材や加工の痕跡のある鉄が出土しているという。そして、その後この地に地域の首長が興り、前方後方墳など大型の墳墓群を築いたという。電話やインターネットで調べても 詳細は良くわからない。

大陸・朝鮮半島への玄関口 若狭街道の要衝の地にあるこの熊野本遺跡・熊野本古墳群はどんなところだろうか・・・出土した鉄素材はどんなかたちののだろうか・・・。

現地に電話して、照会するのですが、雑木林に覆われた丘陵地を別荘地として開発した場所で、遺跡は残っているが、草に覆われ、行っても何もなく、整理された資料も 現地にはないという。

情報は滋賀県埋蔵文化財センターの簡単な学習シートとみ。

場所は新旭駅のすぐ近く 西側の丘陵地の上。 弥生の高地性集落。この集落が消えた後、この地域を治める首長が小さな谷を隔てた隣接地に次々とこの地の首長が大和との密接なつながりを示す前方後円墳や大型墳墓を築いたという。

この琵琶湖北岸から西岸にかけては、その山中に鉄鉱石があり、数々の渡来人の痕跡とともに「鉄」関連遺物が数々出土している。日本で一番先に製鉄を始めた先進地のひとつ 牧野や古橋に古い製鉄遺跡群が残るこの北近江。

弥生時代にも きっと重要な鉄の痕跡があり、日本での製鉄の始まりにも大きな役割を演じたのではないかと・・・

「鉄」の流れを紐解く上で、欠くことのできぬ所だろう。

とにかく どんなところか 見に行こう。本当にどんな鉄素材が出土したのかも知りたいと。

今年の夏 若狭の縄文時代の貝塚「鳥浜貝塚」を訪ね、この地の縄文人が丸木船を駆使して、日本海沿岸の集落と広く交流していたことを知りました。また、この若狭の地は 古代大和の時代には 瀬戸内海と並ぶ日本海沿岸から若狭を玄関口。琵琶湖から大和へ結ぶ大陸・朝鮮半島との重要な交流路。まだ鉄素材を作れなかった日本への朝鮮半島の鉄の流入路。「鉄の道」である。瀬戸内海経由と並ぶ最重要路「大和の鉄の道」今も「若狭街道」の名で若狭と近江・京都を結ぶ重要路。

この街道を近江から山越して日本海側の若狭平野の出た処 若狭上中町脇袋に古墳時代初期の前方後円墳が築かれ、大和と密接な関係が残されていることも知りました。(脇袋古墳群)

古代大和に先立つ卑弥呼の時代 北九州諸国に独占されていた朝鮮半島・大陸の「鉄」の独占支配が崩れ、山陰諸国 鳥取の妻木晩田遺跡 青谷上寺地遺跡や丹後にも大量に蓄積され、畿内にも鉄が流入する。

鳥浜からの帰りに、「もう一度 北近江の鉄を調べたいなあ 北近江 牧野や古橋の古い製鉄遺跡群ばかりでなく、きっと この『近江・若狭を結ぶ若狭街道』にもそんな時代の『鉄』の痕跡があるだろう」と・・・。

以前、朝日新聞関西版に「鉄器登場」や「日本の原像」の記事に若狭街道に近い拠点で古墳時代の初期の大型墳墓群(熊野本古墳群)が紹介され、また確かその時に調べた、読売新聞の連載資料にも鉄と若狭街道地域に何か書かれていたと。

再度 朝日新聞関西版「鉄器登場」や「日本の原像」の記事を引っ張り出しました。

北近江 安曇川の北岸 饗庭野丘陵の南端「熊野本」にある弥生の高地性集落「熊野本遺跡」と古墳時代初期 前方後方墳など大型墳墓群のスタートを示す熊野本古墳群。大量の鉄素材が出土し、この地で鉄器加工をやっていた可能性があるという紹介されている。

熊野本遺跡はどんなところだろうか・・・ また、大型の前方後円墳を築いた熊野本古墳群にも興味深深。

「熊野本遺跡とともに若狭街道をたどって若狭へ 初期の前方後円墳・前方後方墳を築いた若狭の王墓群も訪ねよう」と地図を出したり、熊野本遺跡のある高島市に電話で照会したり。

熊野本遺跡については 以前調べた滋賀県埋蔵文化財センターの学習シートがあるだけで、良く判らない。

場所は 新旭駅の西側の丘陵地の上。 事前に電話でいろいろ聞いたのですが、昔 雑木林に覆われた丘陵地を別荘地として開発した場所ではあるが、いっても何もないという。

【参考】1. 滋賀県文化財学習シート「熊野本遺跡群」

http://www.pref.shiga.jp/edu/content/10_cultural_assets/gakushu2/data/2250/index.html

2. 朝日新聞 2001.10.10. 日本の原像 古墳時代の始まりを解く鍵 前方後方墳の謎 熊野本古墳群

東海・近江に多い初期の前方後方墳が示す大和王権の対抗軸から中枢へ

1. 北近江 琵琶湖北岸の饗庭野丘陵地 「高島市 熊野本」

安曇川左岸 饗庭野丘陵 「鉄の加工工房があったという弥生の熊野本集落遺跡」



実りの秋を迎えた琵琶湖北岸の湖岸 安曇川の北側に広がる新旭町熊野本周辺から饗庭野丘陵地 2008.9.1.
丘陵地中央下段（○印）の丘が熊野本遺跡群



JR 湖西線 新旭駅から見た西に広がる饗庭野丘陵 中央部が熊野本遺跡の位置



大量の鉄を出土し、「弥生の鉄器加工工房?」といわれる弥生の高地性集落「熊野本遺跡」の位置
谷を挟んで北側にこの地の首長たちの墳墓群「熊野本古墳群がある」

[3] 古墳時代 朝鮮半島との交流の玄関口「若狭」を再度訪ねる 2011.8.30.

脇袋古墳群など若狭の王墓からの出土品見学 & 若狭小浜港・遠敷(おにゅう)の里 Walk



古代 大陸・朝鮮半島への窓口だった若狭



若狭 天然の良港 小浜港 2011.8.30.

まだ日本で鉄が生産できない時代 朝鮮半島の鉄を求めて、朝鮮半島に近い北部九州諸国や、玉加工など特産品の生産に使われる鉄工具などの鉄器需要の大きかった山陰・丹後や北陸などが、朝鮮半島や北部九州と交易を行い、古墳時代当初 それらの諸国が畿内・大和への日本海側交易の窓口でもあった。

その後 5世紀 鉄の需要拡大と共に天然の良港であり、国内交通の利便性の面でも良好な「若狭」が流通拠点として畿内・大和への日本海側交易の窓口の役割を果たして行く。

最近 読んだ本に文言は正確ではないが、

「朝鮮半島の鉄を求める畿内・大和の日本海側交易の窓口は当初 丹後や山陰・北陸など。そして その後 若狭に移る。

丹後などは、流通拠点というより、鉄の消費地。その後 鉄の需要拡大と共に 国内交通の利便性の良い若狭に移った」と。

日本黎明期の古墳時代 大陸・朝鮮半島と大和を結ぶ「和鉄の道」の日本海側の玄関口「若狭」の実像のイメージを膨らませたくて、再度 若狭を訪ねてみよう 8月30日 再度若狭を訪ねました。

「若狭」は古代 大和・畿内から北部九州・大陸・朝鮮半島を結ぶ交易ルートの窓口。

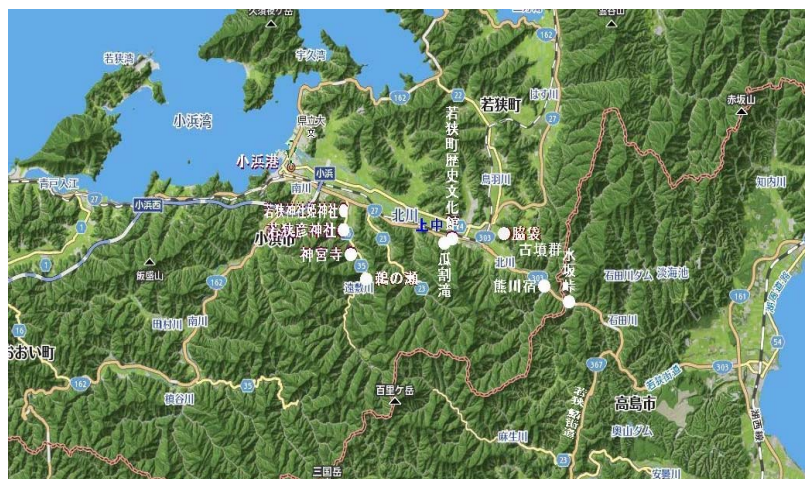
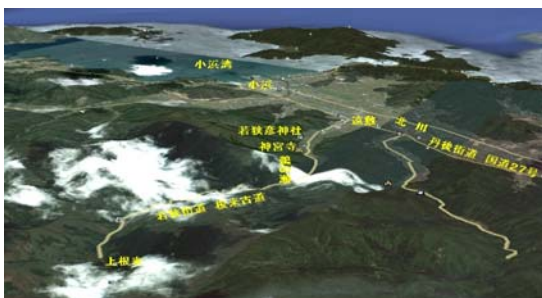
3世紀 邪馬台国の時代から朝鮮半島の鉄を求めて「和鉄の道」が通っていたに違いなく、数々の朝鮮半島との交流を示す遺物や鉄製品遺物が残されている。この「若狭」の国の中心が若狭町上中地域(旧上中町)で、若狭の王墓とみられる数多くの古墳が築かれ、大和との結びつきを示す前方後円墳も数多く残されている。

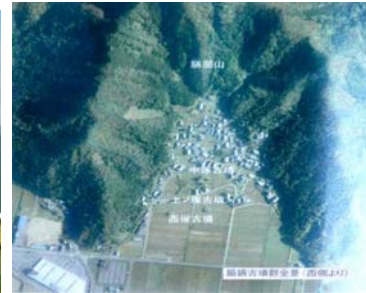
以前にもこの地を訪れたことが、あるのですが、今回この上中地域の古墳群から出土した遺物特に朝鮮半島との交流の歴史を示す遺物を見たくて、若狭町歴史文化館を訪ねました。

また、奈良東大寺2月堂のお水取りで汲まれる「若狭井」の水は若狭からの湧水とする伝承の里「遠敷(おにゅう)の里」そして、大陸・朝鮮半島の日本海側の玄関口「若狭の湊」のイメージをはっきりしたくて、若狭・小浜の港を訪ねました。

今回の若狭再訪で、1500年前 東アジア交流の真ただ中、国際的な海の玄関口として「若狭」がもっとも輝いた時代鏡のような穏やかな広い内海を持つ巾着型の小浜の港の良さ・若狭の王墓 前方後円墳から出てきた鉄ならびに朝鮮系の遺物の数々。そして、数々の文物・技術を持つ渡来人がこの若狭から大和へ登って行ったことを示す遠敷川 鵜の瀬の伝承等々大陸・朝鮮半島から大和へつながる交流路「若狭」の姿を知ることができました。

もやもやしていた若狭の実像が浮かび上がってきて 我ながらびっくりです。



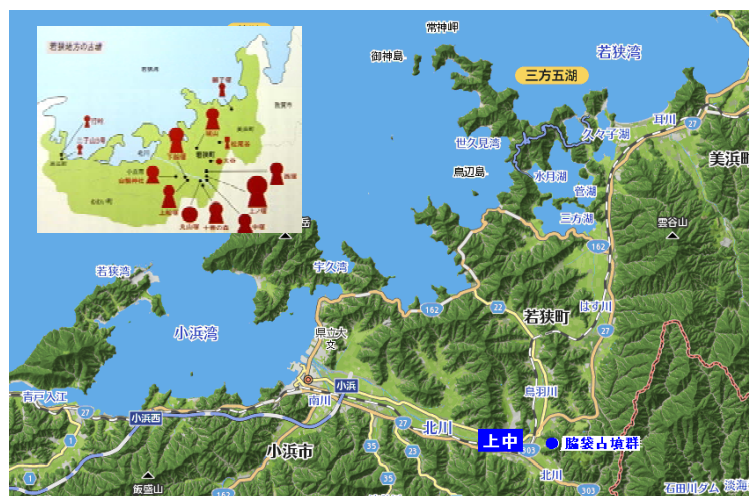


若狭町上中の膳部山麓 脇袋にある 日本の黎明 古墳時代 若狭の王墓 脇袋古墳群

5世紀初 若狭で初めて造られた前方後円墳 上ノ塚古墳ほかかつて七つの塚が存在したという。

現在では、その内、主軸をほぼ南北にした3基の前方後円墳、円墳と思われる糠塚古墳、埴輪と葺石を備えた上下の森古墳などが残っている。古墳群の背後に、標高約200mの膳部山がひかえ、若狭の国造膳臣（かしわでのおみ）との縁を今に伝えているといわれている

弥生時代後期末から古墳時代への移行期（2－3世紀）日本黎明の時代、日本各地には邪馬台国はじめとする地域王権・国が興り、この時代の先進地であった大陸・朝鮮との交流が進む。この時代 若狭をはじめ日本海沿岸でも共同体の規模が大きくなり、王が台頭し、その指標となる墓制の変化が見られ、丹後半島では、方形台状墓から大型前方後円墳の造営が見られた。また、北陸・越前では、四隅突出型墳丘墓から前方後円墳または前方後円墳の造営があった。



そんな日本黎明の弥生後期から古墳時代 大和・畿内から大陸・朝鮮半島や北部九州への交流路として、瀬戸内海と日本海沿岸を北部九州へたどる2つの道があったといわれ、「丹後」そして 少し下って、「若狭」が日本海側交流路の窓口となって活発な交流が行われたと言われる。この若狭の国の湊の中心「遠敷（おにゅう）の里」には 奈良東大寺二月堂の「お水取り」に先立って「水送り」の神事が行われる遠敷川鵜の瀬の伝承がある。

若狭・遠敷に行くまで 知らなかったのですが、インドの高僧と大寺建立 そして 大仏建立に力を尽くした良弁が登場し、ひょとして 和鉄の道が絡んでいるのではないかと頭にあったイメージが大きく膨らみました。

海と川と森の自然に包まれた若狭がもっとも華やかだった時代のイメージWalk。

前回の若狭 walk と一つにして まとめました。



鵜の瀬 「水送り」の神事

奈良東大寺2月堂お水取りに先立ち
若狭の水を 川に注ぎ 奈良 若狭井に送る
この瀬の中央の所に深い穴があり、
奈良若狭井につながっているとの伝承

「和鉄の道・Iron Road」から見た日本誕生前夜の北近江・若狭

北近江・若狭が輝いた時代

1. 大和王権の成立前夜 大陸・朝鮮半島交易を担った玄界灘の海人族 近江安曇川の地名の元となった海人族「安曇族」

弥生時代末期から古代へ 大和王権・国家が成立する過程
大陸・朝鮮半島との活発な交流があった

活発な交流の中で 数多くの文物が日本に伝来したが、
中心だったのは 朝鮮半島の「鉄素材」

製鉄がまだできない倭では 鉄素材の供給を朝鮮半島に頼っていた

邪馬台国連合の絆は 北部九州に握られていた
この朝鮮半島の鉄の安定供給路の獲得であったという

魏書に記載されている弥生時代末 3世紀頃の倭と朝鮮半島の交流

1.1. 魏書(286)に書かれた鉄関連記事

■「魏誌 東夷伝・弁辰条」

国出鉄、韓、遼、倭皆從取之。諸市賈皆用鉄、如中國用貨、又以供給二郡、

國、鉄を出す。韓、遼、倭 皆從かいて之を取る。貨幣がわりにも鉄を用いる、また以て二郡に供給す

■「魏誌倭人伝」

自女王國以北、特置一大率、檢察諸國、諸國畏懼之。常治伊都國、於國中有如刺史。
王遣使詣京都、帶方郡、諸韓國、及都使倭國、皆臨津授露、傳送文書賜遺之物詣女王、不得差錯。
女王國の北方の諸國には「一大率」という官が置かれて國々を監視している。
一大率は伊都國にあり、魏の刺史のような役目を果たしている。
伊都國は外交の中心地で魏や韓の國々の使節はここに停泊して文書や贈物の点検を受けて女王に送っている。

この朝鮮半島・大陸と日本各地との交流を担ったのは誰か???

航海術にたけ、大陸・半島と日本各地を自由に往来した海人族の存在

「南北市羅」 交易を生業とする人たちが玄海灘・北部九州にいた
安曇族・宗像族とよばれる海人族

大陸・半島への水先案内人であり、日本各地に大陸・朝鮮の文物を日本に持ち込んだ
また、渡来人やこの海人族が日本各地に進出、新しい技術・文化を伝えていった

倭人伝 古事・対馬の記事の中に「南北市羅」という言葉がでてる。

「市」を何と読むのか不思議で 読めなかった漢字。「デキ」と読み、「米を買い入れる」ということから「交易」を意味するという。

< 対馬 >

「始度一海千餘里至對馬國 其大官曰卑奴日卑奴母離 所居絶島方可四百餘里

土地山險多深林道路如蛇旋徑 有千餘戸無良田食海物自足兼船南北市羅」

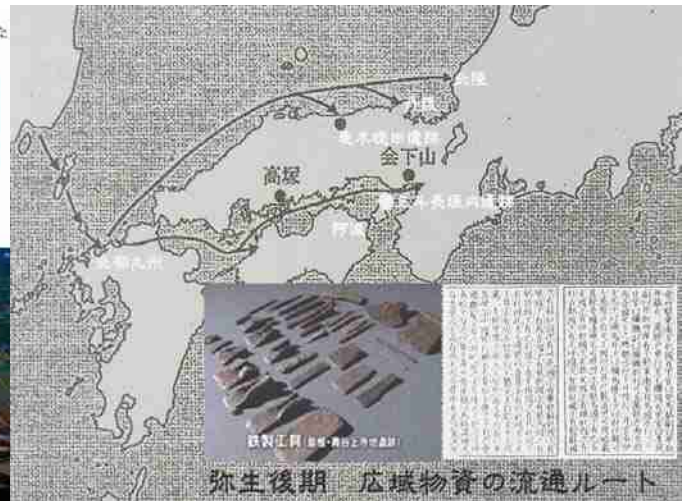
始めて一海を渡る千余里。対馬(対馬)に至る。其の大官を卑奴日卑奴母離(ひなむり)という。
居る所絶島、方四百余里ばかり。土地は山険しく、深林多く、道路は蛇曲の徑の如し。
千余戸あり。良田なく、海物を食して自活し、船に乗りて南北に市羅(してぎ)す。

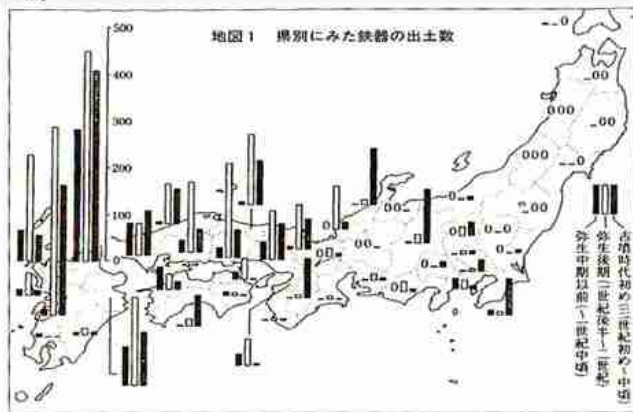
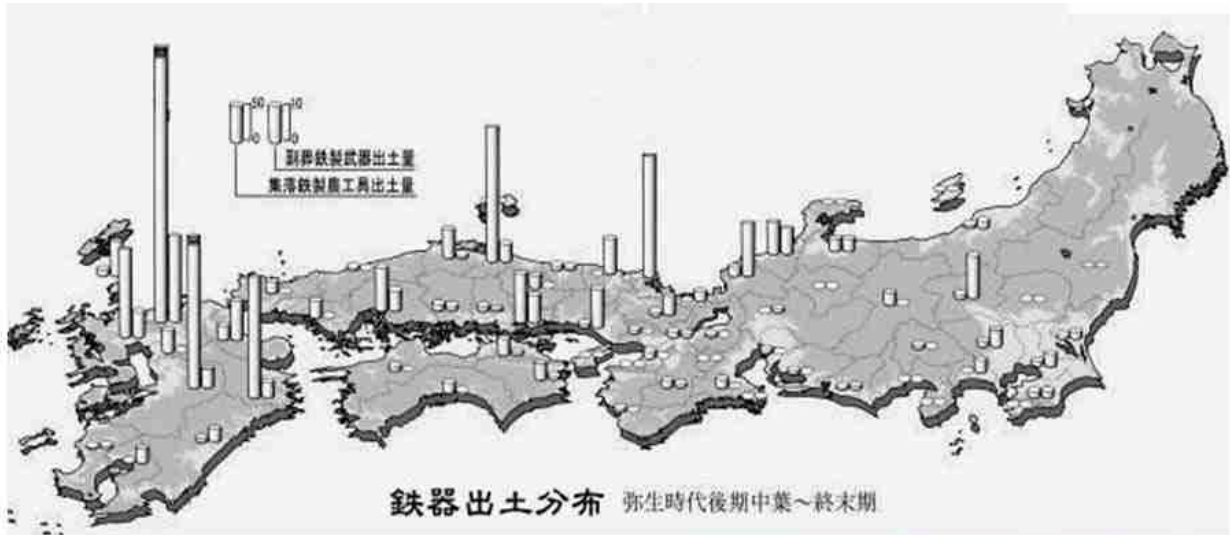
< 吾岐 >

「又南渡一海千餘里日南海至一大國 官亦曰卑奴日卑奴母離 方可三百里

多竹木蕨林有千餘戸 家差有田地耕田猶不足食亦南北市羅」

また南一海を渡る千余里。名づけて日南(かんかい)という。一大國(古事)に至る。官亦また卑奴
日卑奴母離(ひなむり)という。方三百里ばかり。竹木・蕨林多く、千三百戸の家あり。やや田地あり、
田を耕せどもなお食するに足らず、また南北に市羅す。





2. 大陸・朝鮮半島や東国への大和の玄関口 若狭・北近江の和鉄の道を訪ねる

卑弥呼の時代から的大陸への玄関口 若狭・北近江

大陸・朝鮮半島の鉄をもとめて続く若狭・北近江の「和鉄の道」

● 北近江 高島市 新旭町「熊野本遺跡」 BC1～1世紀

北近江安曇川の北岸に連なる響庭野丘陵の南端 熊野本にある弥生の高地性集落 大量の鉄素材を大陸から持ち込んでいたといわれる。琵琶湖の北岸北近江から日本海沿岸・大陸への玄関口「若狭」へ向かう山越えの入り口に当たり、眼下に広がる高島平野と琵琶湖を一望できる。
鉄の畿内流入の重要路で 早くから開かれた地であろう。この地に弥生の大きな集落があり、入手した鉄を鉄器に加工していた。
そして、この弥生の集落が消える時期を同じくして、この地の王たちの墳墓が築かれる。

● 北近江 高島市 新旭町「熊野本古墳群」(熊野本遺跡の隣接地)

3世紀 古墳時代安曇川の地を支配した王が、琵琶湖を見下ろす熊野本遺跡の跡地に築いた王墓群
初期前方後円墳・後方墳など大和との密接な関係・鉄製品や朝鮮系遺物の副葬など大和「鉄の道」北の玄関の守りの王の色彩が濃く、この地が重要拠点だった証拠だろう。

● 若狭 若狭町 上中町 脇袋「脇袋古墳群」 5世紀

若狭から北近江へ遡る北川右岸の丘陵地に初期前方後円墳など大和との密接な関係を示す古墳群が築かれ手回の大和「鉄の道」北の玄関 若狭の出入口であるこの地の王墓群。大陸と大和を結ぶ重要路を守る地域首長の色彩が濃く、大和がこの地 この道を重要視していた痕跡だろう



2.1. 安曇川の左岸 琵琶湖を見晴らす饗庭野丘陵

多量の鉄素材を出土した熊野本弥生集落遺跡と古墳時代前期の古墳群熊野本古墳群



鉄素材を出土した 弥生の高地性集落 熊野本遺跡

この集落には鍛冶・冶の工芸があったのか……

熊野本遺跡は、弥生時代中期(約1000年前)〜後期(約800年前)の高地性集落です。これまでに直径12mの大型の竪穴建物跡(たてぶた)も、また竪穴建物跡が約40棟残っています。また、鉄製品や鉄素材が多数出土していることから、鉄製品(生鉄)製作していた可能性が指摘されています。

遺跡の東側には、東西12m、南北15mの弥生時代前期末の環状土坑(かき)跡、木桶跡(もくかんと)跡が確認されています。また、弥生時代中期の環状土坑(かき)跡も確認されています。また、弥生時代中期の環状土坑(かき)跡も確認されています。

熊野本遺跡からは、弥生時代中期の環状土坑(かき)跡、木桶跡(もくかんと)跡が確認されています。また、弥生時代中期の環状土坑(かき)跡も確認されています。

熊野本遺跡からは、弥生時代中期の環状土坑(かき)跡、木桶跡(もくかんと)跡が確認されています。また、弥生時代中期の環状土坑(かき)跡も確認されています。



弥生時代中期の環状土坑(かき)跡



弥生時代中期の環状土坑(かき)跡



卑弥呼の時代に築造された前方後方墳 この地域の首長墓 熊野本6号墳

初期前方後方墳で、東海がルーツと言われる前方後方墳のルーツは北近江とする説もある重要な古墳である





登山の向かい集落。熊野古道がある南の丘(左)と古墳群がある北の丘(右)との間の周辺。正面に見えるのが南側の丘。そのまま、二つの丘の間の道を登りつづめ、右の丘の頂上の方へ回り込むと右手のブッシュの中に「熊野本古墳」を覗かす立で札が設置されています。その傍をブッシュの奥に消えかかった細い道がある。おそろこの古墳を巡る道だろう。



熊野本古墳群が広がる北の丘へ登りつづめたところに熊野本古墳がありました。 2008.9.1



道路が整備され開発が放棄された北の丘。今は道も雑草に。 2008.9.1.



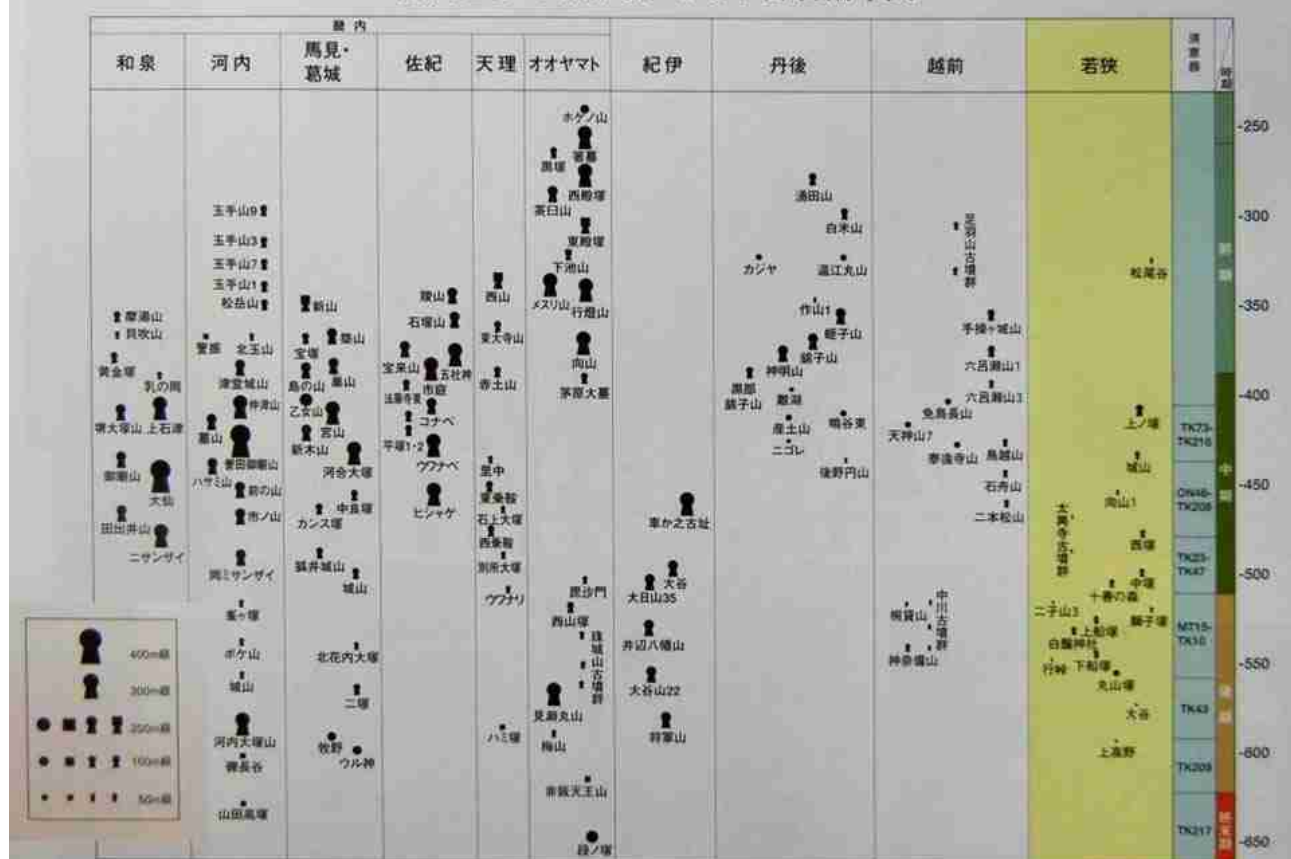
路跡を見つけて、ブッシュの中に入り、踏み跡を頼りにこんもり盛り上がった場所を探す。いづれそんな場所があるのですが、古墳であるかどうか確かでない。この辺りに、大きな円墳。前方後円墳がある辺りなのですが、結局よくわからずに出てきました。

熊野古墳群が分布する北の丘。前方後円墳があるあたり。 2008.9.1.
巨害整備された丘陵地が放棄され、雑草化。雑草・雑木に覆われ、道と見えなくなりました。

2.2. 5世紀 若狭国 初期前方後円墳の王墓群 脇袋古墳群 丹後にとってかわった大和の玄関口 若狭/北近江



畿内とその外縁湾岸地域の古墳編年表



畿内の巨大な前方後円墳に葬られた人物が大王と考えられます。それらは大和→河内→和泉→大和へと移っていきます。周辺の地域の動向は、密接に関わっています。

(高橋克壽氏作成)

© 2005 Blackwell Publishing Ltd, *Journal of Internal Medicine* 258: 103–110



古墳時代前期 4世紀 和尾谷古墳出土品
 新羅縣史稿 第三輯

● 日本最古の横穴式石室 5世紀半の前方後円墳 向山1号墳



北川の北岸 古代大和の鉄の道をめぐる聖徳太子墓 稲荷宮遺跡



新狭国の王屋 船登古墳群が隠岐山の山麓に見える船登の郷 新狭街道の新狭側の出入口 新狭 上中



東面に西麻吉崎、その南側に、土ノ崎吉崎、半崎吉崎が見える。
西に開け、南には菊池街道。北側が筑かれる背後を熊鷹山の山並みに二方を囲まれ狭い平地に
古代菊池街道を納めたこの地の質良なものが載る。
菊池の南端、熊鷹（おしか）のふしむで、一面の墓といわれる。

● 西塚古墳 關於古墳的 5世紀後半的南方國時期



前方後円墳の中央部の土が剥ぎ取られ、現在は後円部と前方部を残すのみとなっているが、金製耳飾り・環・金銅製金具部・銅部・馬具・青など多量の副葬品が出土。



上ノ塚古墳 5世紀の前方後円墳 近畿地方最大の前方後円墳
全長 約 90m 後円部径 57m 高さ 約 4m 前方部幅 48m 高さ 約



上ノ國古墳は、石室における最初の古墳古墳で、円墳・長石・石室を備え、土師器で成る。



中 塚 古 墳 3世紀の前方後円墳 全長 約40m 高さ 10mほどといわれるが影が落ちていて
稲妻の裏面の草の生い茂っていて、裏の面を上げてゆく裏にある。 (ここも稲妻の裏面に隠れていて裏面が見えない)



西塚古墳 3世紀後半の前方後円墳 古墳 稲妻の裏より 開けた北側を眺める 2008.9.1.

2.3 若狭と大和そして 朝鮮半島交流との深い関係を示す若狭 遠敷川(おにゅうがわ) 「鵜の瀬の水送り」 遠敷の郷は 北川と遠敷川が小浜湾にそそぐ当時の湊

鵜の瀬この河原で 神宮寺の「閼伽井」で汲んだ水を 川に注ぎ 奈良 若狭井に送る「水送り」の神事が行われる
この瀬の中央の所に深い穴があり、奈良若狭井に続いているとの伝説



お水送りとお水取り

西暦七一〇年、奈良に平城京が造られ、聖武天皇(在位の七
五二年春に、東大寺において国家を奉げての盛大な大仏開眼供
養が行われました。若狭ゆかりの「良弁僧正」が、その初代別
当(開祖)と言われています。

若狭神宮寺に渡ってきたインド僧「実忠」は、その後東大寺
に二月堂を建立し、大仏開眼の二ヶ月前から(旧暦二月) 天下
世界の安穩を願ひ、一四日間の「祈りの行法」を始められまし
た。「修二会」と呼ばれるこの行の初日に、実忠和尚は「神名
帳」を読み上げられ、日本国中の神々を招かれ行の加護と成就
を請われたのですが、若狭の「遠敷明神」だけが漁に夢中になっ
て遅れ、三月二日、修二会もあと二日で終わるという日の夜
中に現れました。遠敷明神はお詫びとして、二月堂の二本尊に
お供えする「閼伽水(みかたみづ)」を献じられる約束をされ神通
力を発揮されると地面をうがわり、白と黒の二羽の鵜が飛び
出て穴から清水が湧き出しました。若狭の根来白石の川淵より
地下を潜って水を導かせたと伝えられます。

この湧水の場所は「若狭井」と名付け
られ、川淵は「鵜の瀬」と呼ばれるよう
になり、古来より若狭と奈良は地下で結
ばれていると信じられてきました。その
若狭井から「閼伽水」を汲み上げ本尊に
お供えする儀式が、大和路に春を告げる
神事「東大寺二月堂のお水取り」であり
その神約を護り伝える行事が若狭小浜の
「お水送り」なのです。



人の駅 良弁和尚 774年(延暦4) 小浜子
the priest who made great efforts to erect Todaiji
호리이사의 전담에 전담한 호리이사

良弁和尚は、伝説によれば、680年(百濟王)に小浜子
館で生まれましたが、子供の時に亡くなり、奈良金
剛寺(東大寺の前身)で育てられました。彼は、東大寺で
僧侶として修行し、新羅の僧侶を真師に師事し、新羅王に
めまされた。その後、東大寺の建立に尽力し、開元元年(713年)に
4歳で亡くなりました。お水取りの神話を創ったのは、若狭明神の良弁が
神であり、若狭明神が神格化して「修二会」の神話に昇格したと
びとして「一説に良弁にお供えするお水を送ることになった」といふ話から
二月堂の「お水取り(良弁井)」と名付けました。

鯖街道根来道
江戸から明治にかけて、若狭まで
開けた魚介類は大急ぎで京都まで
運ばれていた。

その代表的産物が「鰯」。
ひと握りの鰯は、京都に届くころ
になると、丁度良へ頃の味になった
という。今も小浜、京都間に流る
鰯船もの「鰯船」の誕生である。
この根来は、「京は遠くも十八里
現在という約72kmと親しまれた
針ヶ谷のルートの一部」。





杉の巨木が立ち並ぶ 人っ子一人いない若狭彦神社の境内

遠敷川・おにゅう 鵜の瀬



遠敷神とは若狭一ノ宮 若狭彦・姫神社に祭られている若狭の開拓神のことで、また、鵜の瀬にある白石神社は若狭一ノ宮 若狭彦・姫神社の元宮と言われる。
「白石」には新羅の転化との説もあり、対岸の水送り神事に行われる河原に若狭彦・姫神社の境外地がある若狭一ノ宮 若狭彦・姫神社の聖地。
また、今回 東大寺を建立した良弁の生誕地であり、しかも、この遠敷にやってきたインド僧実忠が東大寺大仏開眼法要を指導したということも知りました。
この地が遠い昔 1500年前 東アジア交流の真っただ中、多くの文物ばかりでなく、渡来の人も多く往来した国際的な海の玄関口。
大陸・朝鮮半島から大和へつながる交流路「和鉄の道」の重要拠点でいたであったことを物語る伝承と思われる。



古代 大陸・半島と日本を結ぶ航路

3. 近江は鉄の国 古代近江で育てられた量産型たたら製鉄

鉄を必要とする拠点での古代製鉄コンビナートのベースを作った

近江は古くから鉄鉱石の産地でもあり古代の近畿最大の鉄生産国でもありました。「砂鉄の採れる出雲や吉備、播磨などが先進地だと考えられがちですが、良質の鉄鉱石が採掘できた近江が鉄製産技術を確立し、60ヶ所以上の製鉄遺跡が発見されています。

特に北東の伊吹山・金萇山、湖北のマキノ、西浅井、比良には多くの遺跡があり湖北は重要な鉄の拠点になっていたとおもわれます。

日本で製鉄が始まったのは8世紀の初め頃。

北近江 木之本の古橋製鉄遺跡は 周辺の鉄鉱石を使って、いち早く製鉄をはじめています。

もう一つ 近江の鉄でのトピックスという 琵琶湖の南東岸の瀬田丘陵では7・8世紀にかけて、国家プロジェクトとして、幾つも同じたたら炉が立ち並び並ぶ量産技術に確立し、量産型の製鉄コンビナートに仕上げました。(野路小野山製鉄遺跡)そして、この製鉄コンビナートをモデルに 鉄を大量に必要とする東北・北九州に古代の大製鉄コンビナートがつけられてゆきました。

これら 製鉄技術の確立には 製鉄技術を持った朝鮮半島の数多くの渡来人がかかわっていたと考えられ、若狭の湊から北近江を通して 入ってきた渡来人が、近江のたたら製鉄技術を支えたと考えられる。

琵琶湖北東部を勢力圏とした息長氏(おきなが)と、琵琶湖西岸を拠点とし勢力を張った和邇氏、そして安曇川の安曇集団もかかわっていたかもしれません。



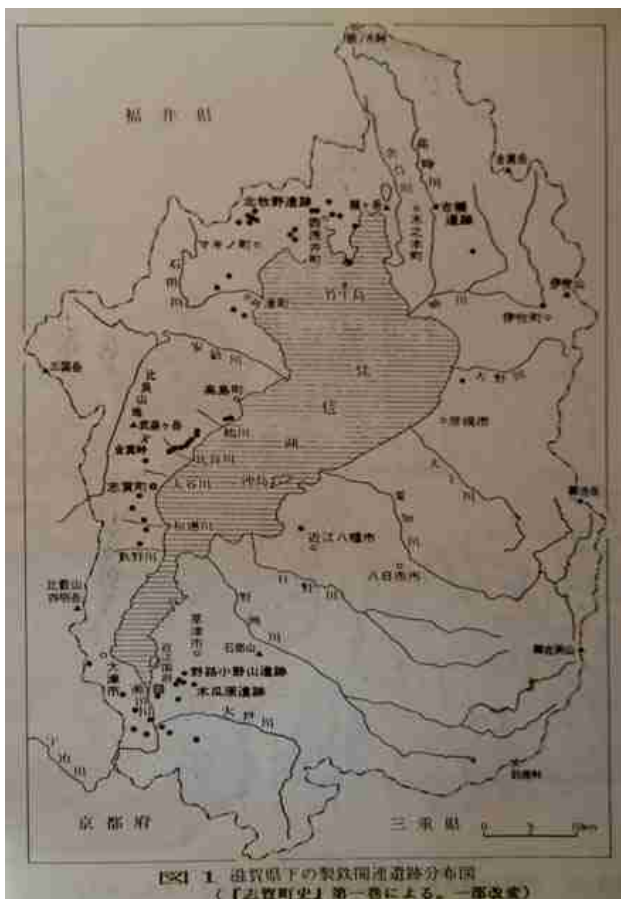
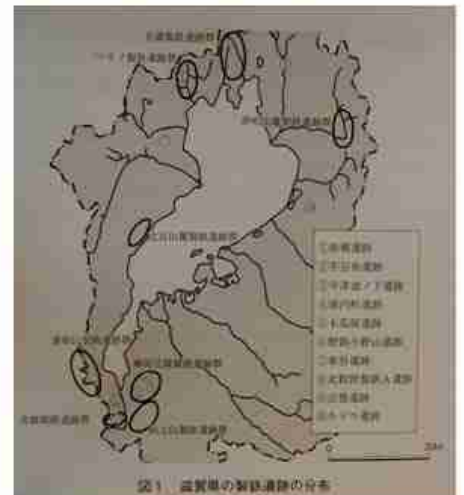
瀬田丘陵 木瓜原遺跡のイラスト図



野路小野山遺跡



近畿で一番古い 北近江 古橋製鉄跡



量産モデル炉による官営製鉄コンビナートへ



炉の大きさ 約1.2m・約2mの箱型炉
人口送風 踏鞴 両側アレイ型排滓

野路小野山たたら炉で完成された量産炉モデル

古代のたたら製鉄量産炉を完成させた近江瀬田丘陵製鉄遺跡群

古代 中国山地で始まったたたら製鉄を 大型・量産技術に発展させた近江瀬田丘陵のたたら遺跡群

2. 古代 たたら製鉄炉の変遷



石見・今佐屋山たたら想像図
(6世紀 小型箱型炉)



大磯町小磯の小林家に伝わる「小林家製鉄炉」
岩手県大槌町：807年の図ともいわれるたたら



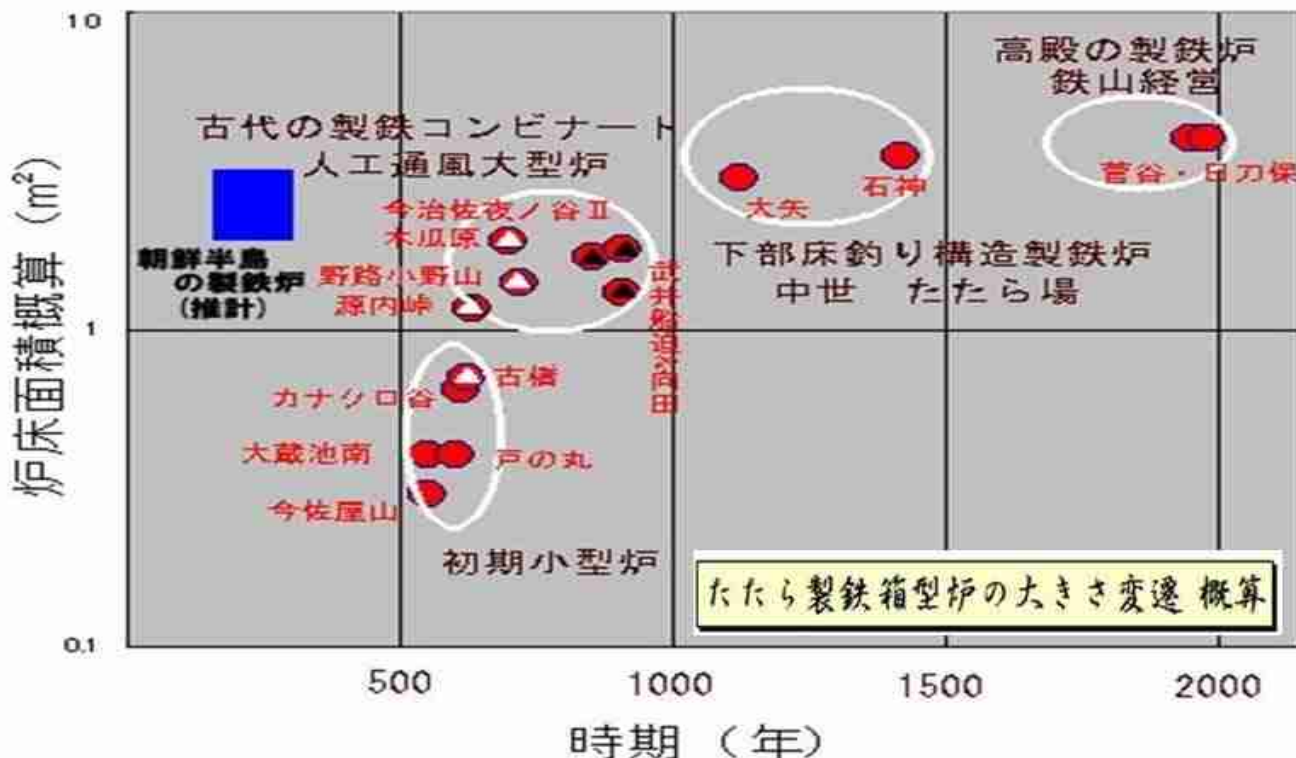
瀬内峠たたら想像図
(7世紀後半 大型箱型炉)



野路小野山たたら想像図
(8世紀 複雑な大型箱型炉)

古代 たたら製鉄 箱型炉の変遷 製鉄開始から大型・量産炉へ

中国山地で6世紀 箱型炉による製鉄がスタート		近江など畿内では量産・大型炉がはじまる		量産モデル炉による官営製鉄コンビナートへ	
石見 今狭山 製鉄遺跡 6世紀後半 45cm×45cm 自然通風・皮吹き	古備 大蔵池南製鉄遺跡 6世紀後半 50~60cm×100~120cm 自然通風・皮吹き	古橋製鉄遺跡の箱型炉 7世紀前半 50cm×2m 自然通風・皮吹き	源内峠製鉄遺跡の箱型炉 7世紀後半 0.3~0.6m×2m~2.5m 自然通風・皮吹き	近江 野路小野山製鉄遺跡 8世紀 約1.2m×約2m 人口送風 踏鞴	陸奥 会沢製鉄遺跡 8世紀 60cm×2m 人口送風 足踏鞴
石見 今狭山 製鉄遺跡		古備 大蔵池南製鉄遺跡		近江 野路小野山製鉄遺跡	





人口送風 踏踏 両側アレイ型排澤
確認された製鉄炉総数は15基となり、A群の少規模炉をスタートに溝で区画された中に(豊熱)と北西から南東側へ横並びで並んでいる。(豊熱)群) また、C群も西側隅に土坑・柱坑が多数はつけられ、西側に工房があったと考えられる。また、3・4号炉の周辺が土坑から原料とみえられる多量の銑鉄片が出土している。

1. 越内 近江 湖田丘陵 野路小野山製鉄遺跡・木瓜原製鉄遺跡

滋賀縣草津市 滋田丘陵 野島小野山聖蹟遠路

[illegible]

同じ形の製鉄炉が数台と並んで立ち並んでいました。今は国道1号線バイパス道路の下

張四照華津 野路小野山麓鐵南橋 2007.1.30



西 北 東



3世紀 たたら炉で整然と並ぶ古代の官営製鉄コンビナート
徳島県東津高田 野島小野山製鉄遺跡 2007.1.30



1.2. 水戸清製機造 製造から製造加工 覚醒製造場を持つ大規模な製造コンビナート



7世紀後半から8世紀 地方拠点に 大和政権の大製鉄コンビナートが出現した



■ 7世紀後半から8世紀 大和政権を頂戴した古代の国家的組織の大製鉄コンビナート

① 近江の山梨製鉄遺跡

近江草津野路小野山梨製鉄遺跡



② 近江の山梨製鉄遺跡(大和政権の中心地)

近江 山梨製鉄遺跡(大和政権の中心地)

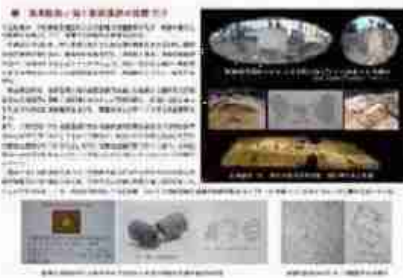


③ 近江の山梨製鉄遺跡(大和政権の中心地)



近江 草津野路小野山梨製鉄遺跡

近江 木瓜原製鉄遺跡(立命館大草津キャンパス)



四国今治 高橋佐夜ノ谷製鉄遺跡



福島県 武井・金沢製鉄遺跡群



福岡県 元岡製鉄遺跡群
(九大伊都キャンパス)



日本海側 新潟県柏崎からも
古代 9世紀の大製鉄コンビナートが最近出土
柏崎 軽井川南製鉄遺跡